

白居易詩研究

——「長恨歌」とその周辺——

勝見 葉

はじめに

本論は中唐の詩人である白居易が制作した詩「長恨歌」について、その主題や、詩の中で描かれている玄宗と楊貴妃の心の動き、末尾における両者の隔絶について論じるものである。また、陳鴻が著した「長恨歌伝」や、白居易が「長恨歌」の後に詠んだ詩「李夫人」との比較を通じて、「長恨歌」の問題点を深めることを意図している。

序章 「長恨歌」の主題とその批評

「長恨歌」は、玄宗皇帝と楊貴妃の悲恋を描いた、七言百二十句からなる長篇の物語詩である。「長恨歌」という題は最後の「此の恨縣縣として尽くる期無からん」との表現に基づいており、長く消え去ることのない「恨」について述べられたものである。ここに

いう「恨」とは、愛する人を失った人間の哀しみを表している。似た意味の言葉に「怨」があるが、その違いについて松浦友久（一九八二）は次のように述べている。

ではその「怨」とは何か。……それは、或る願望が、客観的にはかなえられるべき条件下にありながら（実現の可能性を持ちながら）現実にはかなえられない、というところから生まれる不満・憤懣の情である。……一方、そうした可能性の失われたことへの自覚に基づく悔恨・無念さは、「恨恨」によって表される。両者の要点を言えば、「怨」は情況が可変的・流動的であり、「恨」は不可変的・固定的である。^{注1}

つまりは「怨」は実現可能なことが叶えられない悲しみ、恨みであるのに対し、「恨」は実現不可能なことを自覚した悲しみ、恨み、ということである。このことから「長恨歌」末尾に描かれる、楊貴妃と死別し、もう二度と生きて会うことのできない玄宗皇帝

の悲しみは後者の「恨」がふさわしいということがわかる。

「長恨歌」に登場する「漢皇」と「楊家の女」は一般には玄宗と楊貴妃のこととされている。これは述べられている詩の内容が玄宗と楊貴妃について述べているものであることが明らかである。しかし、「長恨歌」は玄宗と楊貴妃のことについて、史実に必ずしも忠実に詠まれているわけではない。近藤春雄（一九九三）はその史実との差について、

楊貴妃は楊玉環といい、すでに玄宗の王子の寿王の妃になっていた女であり、玄宗はそれを奪い取ったのである。しかし長恨歌はそんなことには触れず、ただ「楊家に女有りて初めて長成す、養はれて深閨に在り人未だ識らず」と、いかにも

深窓のういういしい美女を得たかのように詠じている。それに玄宗自身、「此の恨繚繚として尽くる期無からん」と詠ぜられてはいるが、果たしてそれほど専一に貴妃を思い続けているかといえ、それには怪しいものがないわけではない。というのは唐の曹鄴の「梅妃伝」によれば、玄宗にはまた梅妃という愛する宮女がおり、貴妃の目を盗んでは会うことをし、馬嵬の変ののち、都に帰ってからも、賞金まで出して梅妃の所在を探し、その死んで埋められた場所がわかっつては、みづから出かけて行って慟哭し、改葬までしているからである。^{注2}

と述べている。玄宗と楊貴妃のことを詠じたものといっても、史実そのままではなく、純粹な愛の詩となるよう改変された部分が見られるのである。そのことよって、ただ玄宗と楊貴妃の故事を史実に忠実に描く以上に、人々の心を動かす感傷詩となっている。美しい女性と出逢い、その人を愛してしまえば、誰しもが惑い、苦しむこととなる。「長恨歌」はそのような愛を描いた詩としての美しさを追求しているのである。

第一章 「長恨歌」と陳鴻「長恨歌伝」との比較

第一節 「長恨歌伝」作成の背景とその作意

「長恨歌伝」は、陳鴻の作であり、「長恨歌」同様、玄宗と楊貴妃を題材とした、唐代の伝奇小説である。伝本は、今現在見られるもので二種類ある。一つは「長恨伝」という題の『太平広記』に収められているものである。もう一つは、「長恨歌伝」と題されて『白氏長慶集』に収められ、宋代には『文苑英華』に収められたものである。両者の違いが著しく表れるのは、末尾の、「長恨歌伝」（「長恨伝」）を作成した由来を述べた箇所である。「長恨伝」と「長恨歌伝」末尾を比較すると、後者ではより詳細にその由来について述べられている。ここで、後者の内容を要約して述べる。

元和元年、西曆八〇六年の十二月、太原の白居易と、作者陳

鴻と、琅邪の王質夫は連れ立って仙遊寺へと向かった。その時、玄宗と楊貴妃の事が話題に上り、感歎しあつた。そこで王質夫は白居易に玄宗と楊貴妃の悲恋を歌にしてみてもどうか、と提案する。その提案を受けて、白居易は「長恨歌」の作成にあつた。「長恨歌」の趣旨として、傾国を招くような美しい女性を懲らしめて、世の中が乱れるのを防ぐ意図もあつた。「長恨歌」が先に作られ、その後、陳鴻が「長恨歌伝」を作つた。陳鴻は今知られていることを集めて、「長恨歌」の伝記として「長恨歌伝」を仕立てた。

書かれている通り、「長恨歌伝」は「長恨歌」を前提として作られたものである。上記の記述の中で、国を傾ける「尤物」（すぐれて美しい女性）を批判し、天子がそれに惑溺して国に「乱階」（騒乱の起る兆し）を招かぬよう戒める意図が「長恨歌」にはあつたとはいきりと書かれている。

第二節 「長恨歌」の「長恨歌伝」との異同

「長恨歌伝」と「長恨歌」は、同じ玄宗と楊貴妃の逸話について述べているが、両者にはその立場に大きな違いがある。本節ではその相違について述べる。

まず、「長恨歌」が玄宗の楊貴妃への愛の深さを肯定的に描いて

いるのに対し、「長恨歌伝」は色に耽溺する皇帝として否定的に描いている。下定雅弘（二〇〇七）も「長恨歌」と「長恨歌伝」を比べ、

「伝」が前半で玄宗の楊貴妃への愛の顛末を語り、後半は方に士に仙界の貴妃を尋ねさせる話であるのは、「歌」と同じである。ただし「伝」には、明らかに楊貴妃に溺れる玄宗を批判する言葉が見える。^注

と述べており、本論ではこの説を支持する。また、加えて、楊貴妃に関しても「長恨歌」ではただ玄宗の寵愛を一身に受ける儂げな美女として描かれているが、「長恨歌伝」では、玄宗の愛を自らものとするため思慮を巡らせる、受動的なだけでは無い狡猾な女性として描かれている。以下に両者の相違を玄宗と楊貴妃、周囲の人々の三つに分けて述べる。

一、玄宗

玄宗の描かれ方に違いが表れている箇所として、まず「長恨歌伝」の「玄宗在位歳久、倦于盱食宵衣、政無小大、始委于右丞相、稍深居遊宴、以声色自娛。」（玄宗位に在ること歳久しく、盱食宵衣に倦みて、政、小大と無く、始めて右丞相に委ね、稍く深居遊宴して、声色を以って自ら娛しむ。）という部分と、「長恨歌」の

第一句、第二句の「漢皇重色思傾国、御宇多年求不得」（漢皇色を重んじて傾国を思ひ、御宇多年求め得ず。）が挙げられる。下定雅弘（二〇〇四）も同箇所を挙げ、

この文の筆致が玄宗が政治に厭き、女に溺れていることへの否定的なものであることはあきらかである。ひるがえって、

「長恨歌」には、「傾国を思う」玄宗を否定するような表現はない。^{注4}

と述べている。

「盱食宵衣」は日々の政務のことであり、「長恨歌伝」では、毎日の宮中での仕事に飽き飽きし、そのすべてを右丞相に任せてしまっている様子が描かれている。そしてその結果、音楽や女色に耽るようになってしまった、とその怠惰さを批判しているのだから。一方、「長恨歌」では、ただ美しい女性を求めていたとだけ書かれており、玄宗が女色に耽る様子は書かれていない。

二、楊貴妃

楊貴妃の描かれ方の違いが表れている箇所としてはまず、「長恨歌伝」の「絲是治其容、敏其詞、婉絲万態、以中上意。」（是れによりて其の容を治にし、其の詞を敏にし、婉絲万態、以て上が意に中つ。）が挙げられる。ここでは、楊貴妃が玄宗の寵愛を保つた

めに、自らのその美貌により磨きをかけ、より愛されるよう言葉を選んで操っている様子が書かれている。一方、「長恨歌」では単にその美しきや寵愛の深さを第五句から第二十二句までに、「迴眸一笑百媚生、六宮粉黛無顏色」（眸を廻らして一笑すれば百媚生じ、六宮の粉黛顔色無し）「春宵苦短日高起、從此君王不早朝、承歡侍寢無閑暇、春從春遊夜專夜、漢宮佳麗三千人、三千寵愛在一身」（春宵短きに苦しみ日高くして起き、此より君王早く朝せず。歡を承け寝に侍して閑暇無し、春は春遊に従ひ、夜は夜を専らにす。漢宮の佳麗三千人、三千の寵愛、一身に在り。）などと述べられており、楊貴妃が意図的に寵愛をより深く受けるよう動いたと捉える意識は感じられない。

また、「長恨歌伝」では、楊貴妃の受けるただならぬ寵愛について「非徒殊艷尤態独能致是。蓋才智明慧、善巧便佞、先意希旨、有不可形容す可。」（徒に殊艷尤態の独り能く是を致せるのみに非ず。蓋し才智明慧、善巧便佞にして、意に先んじて旨を希ふこと、形容す可からざる者有ればならん。）と述べられている。つまり、このような寵愛を受けるのは、ただ楊貴妃が美しいからというだけではなく、彼女が敏く、玄宗が望むような振る舞いをし続けたからだというのである。「才智明慧」とは心の働きの敏いことを言い、「善巧便佞」とは、言葉は巧みであるが、誠実でないことを意

味する。

「長恨歌伝」では、楊貴妃をただ玄宗に愛された純粋な美女としてではなく、その愛を受けるべく思慮を巡らせる、美しくも狡猾な存在として描いているのである。

また、仙界での楊貴妃の行動にも差異が見られる。「長恨歌」では方士が仙界に居る楊貴妃のもとから去ろうとした時、第一百十三句で自ら「臨別殷勤重寄詞」（別れに臨んで慇懃に重ねて詞を寄す）と、かつて長生殿で誓い合った言葉である第一百十七句、第一百十八句「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」（天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん。）と方士に伝える。「長恨歌伝」でも楊貴妃は方士に対し、以下のように述べる。「上凭肩而立、因仰天感牛女事、密相誓心。願世世爲夫婦。言畢、執手各嗚咽。此獨君王知之耳。」（上は肩に凭りて立ち、因りて天を仰ぎて牛女の事に感じ、密かに心に相誓う。願はくは世世夫婦と為らんと。言ひ畢りて、手を執りて各々嗚咽す。此れ獨り君王之を知るのみと。）

これは、玄宗が七夕の夜に牽牛と織女の物語に感じ入り、楊貴妃に生まれ変わっても夫婦となろう、と誓って、二人で手を取り合つてむせび泣いたという、楊貴妃と玄宗しか知らない思い出について語っている。しかし、「長恨歌伝」で楊貴妃がこのように述

べたのは、方士に求められたことである。方士は、楊貴妃から「金釵鈿合」と呼ばれる黄金のかんざしと螺鈿の小箱を受け取ったものの、「色有不足」（色足らざる有り）つまりは、物足りなげな風情で帰ろうとしない。楊貴妃が問いたですと、「請當時一事不聞于他人者、驗於太上皇。不然恐鈿合金釵、負新垣平之詐也。」（請ふらくは当時の一事の他人に聞かれざる者もて、太上皇に験せんことを。然らずんば恐らくは鈿合金釵も、新垣平の詐りを負はんと。）と答える。現世で生きていた当時のことで他人に知られていないことを教えてほしい。そうでないと、この螺鈿の小箱も金のかんざしも、詐欺ではないかと疑われてしまうので、ということである。

このように方士から請われた楊貴妃は前述のように生前を回顧し語るのである。「長恨歌」においても「長恨歌伝」においても方士に対して、生前の楊貴妃と玄宗の仲睦まじい様子について語る点においては同じだが、「長恨歌」では自ら懐古し、仙界を去ろうとする方士に伝えるのに対して、「長恨歌伝」では、方士から、楊貴妃を探し出し謁見したことや、かんざしと小箱が捏造であると疑われぬように聞き出されたために、その証拠として伝えるのである。方士が仙界へと楊貴妃を求めたこの場面において、「長恨歌」では仙界でも生前の幸せだった日々を懐古し、玄宗を思い続けて

おり、そのために方士がやってきた時、自然と長生殿での睦言が思ひ出された、楊貴妃の愛のひたむきさが感じられる。しかし「長恨歌伝」では、あくまで方士に請われて、思ひ起こして語る。ここには、楊貴妃の玄宗への愛の描かれ方の違いが見えるだろう。

三、周囲の人々

玄宗と楊貴妃の描かれ方だけでなく、彼らの周囲についても「長恨歌」と「長恨歌伝」では、その描写のされ方に相違がある。まず、楊一家の栄華を見た民衆の心理について「長恨歌」では、その栄華を第二十四句で「可憐（憐れむ可し）」と感嘆した後、第二十六句で「不重生男重生女」（男を生むを重んぜず女を生むを重んぜしむ）と玄宗の楊貴妃への寵愛が、世間の意識まで変えてしまったという、愛のただならぬ様を強調する表現として書かれている。しかし「長恨歌伝」では「故当時謡詠有云、生女勿悲酸、生男勿喜歡。」（故に当時の謡詠に云へる有り、女を生むも悲酸する勿かれ、男を生むも喜歡すること勿かれと。）と、「長恨歌」と同じように述べた後に「其天下心羨慕如此。」（其れ天下の心の羨慕すること此くの如し。）と書かれ、ただ栄華を誇る楊一家に対し感嘆し慕うのではなく、その栄達を羨む感情が述べられている。下定雅弘（二〇〇七）は同箇所を挙げ

「歌」の第23句から26句「姉妹弟兄皆な土を列し、憐れむ可し 光彩門戸に生ず。遂に天下の父母男を生むを重んぜず、女を重んぜしむ。」は、玄宗が楊貴妃を大切にするその余りの無軌道ぶりを述べることで、玄宗の貴妃への耽溺を表現している。ここが、「伝」では……玄宗の愚昧を批判する筆致である。^{注5)}

と述べている。

このしばらく後に馬嵬で「當時敢言者、請以貴妃塞天下之怒。」（當時敢へて言ふ者、貴妃を以て天下の怒りを塞がんことを請ふ。）と楊貴妃の死を以て、世間の怒りを鎮めるべきだと陳述され、楊貴妃はその命を奪われる。この流れをみても、この「羨慕」という言葉には、行き過ぎた寵愛への批判が窺えるだろう。

また、馬嵬で楊貴妃が命を奪われたことについて「長恨歌」では第三十五句から第四十二句で、「六軍不發無奈何、宛轉蛾眉馬前死」（六軍發せず奈何ともする無く、宛轉たる蛾眉馬前に死す。）などと、玄宗の悲嘆にくれる様子とともに動かぬ軍隊に致し方なく楊貴妃に手をかけた、と書かれている。

一方、「長恨歌伝」では「六軍徘徊、持戟不進、從官郎吏、伏上馬前、請誅錯以謝天下。国忠奉鬻纓盤水、死於道周。左右之意未快。上問之、當時敢言者、請以貴妃塞天下之怒。上知不免、而不

忍見其死、反袂掩面、使牽之而去。蒼黃展転、竟就絶於尺組之下。」(六軍徘徊、持戟進まず、従官郎吏、上の馬前に伏して、錯を誅して以て天下に謝せんことを請ふ。国忠髻纓盤水を奉じて、道周に死す。左右の意未だ快からず。上之を問へば、当時敢へて言ふ者、貴妃を以て天下の怒りを塞がんことを請う。上は免れざるを知るも、其の死を見るに忍びず、袂を反し面を掩ひて、之を牽きて去らしむ。蒼黃展転として、竟に尺組の下に絶するに就きぬ。)と述べている。軍が動かず、免れられない事として楊貴妃に手をかけた、という点では「長恨歌」と同じであるが、楊国忠を害してなお、左右の役人や兵士の怒りは収まらず、楊貴妃の死を以て、その怒りを鎮めるべきとまで願い出られる、という周囲の強い憤りが窺える筆致となっている。下定雅弘(二〇〇七)も同箇所を挙げ、「長恨歌」ではやむを得ないこととして、楊貴妃の死を受け入れた玄宗を肯定しており、第五十五句「君臣相顧尽霑衣」(君臣相顧みて尽く衣を霑し)で臣下たちが玄宗に同情している描写も「長恨歌伝」との差異であると述べている。また「長恨歌伝」では楊国忠を殺してもなお臣下の怒りは収まらず、楊貴妃を殺せと憤懣が高まっていることが克明に述べられている、として^{注6}いる。この説について、「長恨歌伝」が周囲の人々の怒りを窺わせる書き方になっていることには賛成するが、玄宗が楊貴妃の死を受け入れ

たという点については「長恨歌」の第三十七句「無奈何」(奈何ともする無く)という表現からは読み取れない、玄宗はあくまでも、楊貴妃の死を止められなかったのだ、と考える。

また、臣下たちが玄宗に同情する描写は「長恨歌伝」にも「左右歎歌」(左右歎歌す)つまりは、左右のものもすすり泣いている、という描写が見られるため、そこは差異とはならないと考える。あくまでも、周囲の人々が玄宗と楊貴妃に対し、怒りを持っていたということが「長恨歌伝」では描かれており、そこが「長恨歌」との差異であると考ええる。

以上のように「長恨歌」と「長恨歌伝」では、玄宗や楊貴妃、そしてその周囲の人々の書かれ方に相違がある。玄宗と楊貴妃の愛の礼賛に終始している「長恨歌」とは違い、「長恨歌伝」では玄宗を色に耽溺する皇帝として批判的に描き、また楊貴妃を、美しただけでなく玄宗を自らの虜とするために言葉を操り、妖艶に振る舞う、狡猾な美女として描いている。

「長恨歌伝」は「長恨歌」が書かれた後、その伝記として書かれた作であるが、両者には多くの差異が見られた。その差異から、「長恨歌」が世の進士らに対する戒めとして、史実を忠実に描いた諷諭詩ではなく、玄宗の楊貴妃への愛を賛美し、玄宗の愛の深さを示す意図で書かれた、感傷詩であることがわかる。一貫して、

玄宗の楊貴妃へのただならぬ愛と尽きぬ「恨」を描いた「長恨歌」は、玄宗と楊貴妃という名の知れた人物の故事を描くこと以上に、美しい女性と出会い、その人を失くしてしまった男の激しい愛の悲しみを描き、読んだ者の心を動かすことが、ねらいとするところなのである。

第二章 「李夫人」との比較

第一節 「李夫人」の主旨

「李夫人」は「新楽府」五十首の第三十六首である。元和四年（八〇九）から七年の間に書かれた作品で、「長恨歌」の数年後の作である。「李夫人」は、白居易が左拾遺・翰林学士という、天子の側近、諫官として勤務している頃に作られた。下定雅弘（二〇一一）は「李夫人」について、

この作品は、その登場人物といい、措辞といい、明らかに白居易の作品の中で「長恨歌」に最も近い作品である。^{註7}

居易の作品の中で、「新楽府」は、その時代の天子に向けて、戒める諷諭詩である。「新楽府」は、その時代の天子に向けて、この作品を読み治世の参考とするよう書かれたものである。「李夫人」の序には「鑑嬖惑也」（嬖惑に鑑みる）とあり、これは美女を娶っ

た貴人、帝王らがその色香に惑ったことを戒めとする、という意味である。白居易は「李夫人」を読んだ君子に、愛するあまりに悪い、苦しむような美女とは出会ってはいけぬ、と思わせるよう、漢の武帝や周の穆王、玄宗の悲嘆を描いたのである。実際、詩の中で白居易は、李夫人を失った漢の武帝の悲しみを繰り返し描いている。

まず第一句から第五句では、武帝が病に倒れた李夫人の側を離れず、その死後も李夫人に対する愛情を持ち続け、甘泉殿^{註8}で李夫人の肖像画を描かせる様子が描かれている。

第六句から第十一句では、李夫人の肖像画を描かせてはみたが、所詮はただの絵であり、本物の李夫人のように話したり笑ったりするわけではないと嘆き、遂には方士に頼み霊薬を調合させて反魂香^{註9}を作らせ、李夫人の魂を呼び戻す様子が描かれている。

第十二句から第十五句では、李夫人の魂がどこに現れたかと武帝が惑い、やってきたと思えば、魂はしばらくの間も留まらずすぐに消え去ってしまう様子が描写される。

第十六句から第十九句では、武帝の、去ってしまったのはなんと早く、やってくるのはなんと遅いのか、と苦しく思う気持ちが描かれている。また、魂の姿は李夫人が元氣だった頃と同じで病に臥せていた時とはまるで違う様子であり、本物かどうかともわか

らないと惑う様子が描かれている。

第二十句から第二十三句までは、魂が来なければ悲しみ、やってきてもまた苦しみ、せつかくやってきても帳の向こうにいるばかりで会って語り合うこともできず、遠くから眺めるだけだと、呼び戻した李夫人の魂によって、より一層武帝が苦しめられる様子が描写されている。

第二十四句から第二十九句では、今まで述べたような愛する女性を失った強い悲しみは、武帝だけのことではなく、昔からずっと繰り返されてきた、と書かれ、その例として、周の穆王や玄宗のことが述べられている。作中では玄宗本人を名指している。ここでは涙を流して、馬嵬で楊貴妃を思う玄宗が描写されている。馬嵬は楊貴妃が亡くなった場所であり、玄宗が敗走した蜀から長安に戻る途中に訪れた際、楊貴妃を思い、嘆き悲しむ玄宗と臣下の様子が描写されている。戦乱の中でやむを得ず命を奪われた楊貴妃を、戦乱の後も思い、悲嘆する玄宗の愛のひたむきさが表現されている。

第三十句から第三十二句では、美しい女性はその身体が土となっってしまった、失った悲しみは消えることなく永遠に続くものであり、生きていても死んでいても、男を惑わせるものであることが語られている。

第三十三句、第三十四句、第三十五句では「尤物」つまりは国を傾けるほどの美女はとも忘れられるものではなく、人は木石ではなく情というものをもっているものなので、元からそんな美女とは会わないほうがいい、という戒めが、「人非木石皆有情、不如不遇傾城色」（人は木石に非ず皆情有り、如かず傾城の色に遇はざらんには。）などと、書かれている。ただ絶世の美女に出会ってもし心を奪われてはいけないとは書かず、絶世の美女に出会ってしまったら、後は抗いようもなく苦悶することになるのだから、最初から出会うべきではないという書き方がなされている。これは、強い戒めの意識だけではなく、愛というものの力は非常に激しいもので、天子さえも抗うことのできないものであるという、愛に對するある種の称賛が窺えるだろう。

第二節 「長恨歌」から見る「李夫人」

第一節で述べたように「李夫人」の内容は、そのほとんどが、漢武帝の李夫人を失った悲しみをうたっている。「李夫人」の中で漢武帝は李夫人と死に別れた後、肖像画を描かせ、反魂香で李夫人の魂を呼び戻させたが、そのような行為は、その失った悲しみをより一層つらいものとしているばかりであることが詩で表現されている。そして、「長恨歌」の第七十五句「臨邛方士」を遣わせ

て仙界へ楊貴妃に会いに行く場面は、「李夫人」の反魂香によって李夫人の魂を呼び戻した場面と類似していると考ええる。

前述のとおり、「李夫人」では、李夫人との接触の後、より一層悲しみを深くした明確な描写がなされている。「長恨歌」は、「臨邛方士」を遣わせる前、第七十四句までは、玄宗の楊貴妃を失った悲しみについて述べているが、仙女となった楊貴妃を探し出し、「旧物」を持ち帰った第百七句の後の玄宗の心情に関する描写は、ただ「恨」の深さについて玄宗が述べた末尾二句のみとなっている。道士が持ち帰ったであろう「旧物」を玄宗が受け取る場面は描写されていない。

果たして、玄宗は楊貴妃が「深情」を示すために送ったという「旧物」を見て幸せに思ったであらうか。その答えは「李夫人」の中で描かれているように思う。「李夫人」で漢武帝が、絵を見て悲しみ、魂を呼び戻そうとしては心を苦しめたように、楊貴妃のかつての持ち物がかえってきて、楊貴妃自体も、楊貴妃と過ごした幸せな日々も戻ってこないことが彼を余計に苦しめたのではないだろうか。このように「李夫人」は「長恨歌」で描かれなかった玄宗の悲しみを、読者に想像させる要素があったのではないかと考える。「李夫人」は「長恨歌」が書かれたすぐ後に書かれた作品である。その詩の中でも玄宗と楊貴妃を例に挙げるなど、

読者は「李夫人」を読んで、広く流布した「長恨歌」のことを思い起こしたであろうことは想像に難くない。「李夫人」は「新楽府」の諷諭の詩である。進士の若者に対し、生きていても死んでいても心を乱され悲しむことになる「尤物」には出会わない方がいい、という戒めが書かれている。しかし、その中に、「長恨歌」で描かれなかった玄宗の悲しみを連想させるような、漢武帝の、李夫人を失つてなお魂とだけでも再会しようとしては、余計に苦しむこととなる悲哀が描かれている。諷諭詩においても玄宗の楊貴妃を失った後の悲しみを暗示し、人間の救い難い悲しみを人々に深く思わせる働きをなしたのではないだろうか。

第三十二句、第三十三句で「尤物」によって、いかに人は惑い、その存在を忘れざるものとするのかが描かれている。そのために第三十五句でそのような「尤物」には出逢わないほうが良いと詩は締められるが、そこには訓戒だけではない意識があるように感じる。第三十四句で人は「木石」では無いため、「情」というものがある、と書かれている。「情」というものは、ある種人を人たらしめているものだということである。その「情」、人間の持つ業をすべて否定する意図は無いということが、この第三十四句から感じられる。

人間が持つ「情」というものは、人が生きていく上で如何様に

も付きまとうものであり、その業から逃れられないのが人間であり、それは武帝や玄宗といった天子においても同じである。「李夫人」は、進士などの若者に対する戒めを主旨とした諷諭詩であるが、その中には、会わないことを選ばざるを得ないほどに、愛の力は甚だしいという認識がある。また、愛情に惑うのは、人を人たらしめる「情」というものによつてのことであり、それを持つてしまうのは、人間の逃れられない業によるという考えも見られる。業の深さもまた、「李夫人」では描かれているのである。

第三章 「長恨歌」の主題

第一節 「長恨歌」主題の解釈

「長恨歌」は全体で百二十句から成る長編の作であるが、主題によつて分けるならば大きく前段と後段に分かれる。第七十四句までが前段であり、次の第七十五句からが後段である。前段では、玄宗と楊貴妃のめくるめく愛情の日々から悲劇的な死別と玄宗の耐え難い悲嘆が描かれている。後段からは悲しみに暮れる玄宗が道士を遣わして仙界へと楊貴妃を求め探させる様子と、仙女となった楊貴妃（玉妃）を探し出すことができたものの、もう二度とこの世で会うことのできない悲しみを第百十九句、百二十句で、「恨」として描いている。

「長恨歌」にはその主題の解釈について、幾つかの説が存在しており、その一つが愛情説である。「長恨歌」の基本的な主題は愛情の賛美だという考えであり、現在、論争の中で上位を占めており、近年の日本の学界でも圧倒的に優位である。本論でもこの「愛情説」を支持したい。そしてその中でも、玄宗の楊貴妃に対する「愛情」が主題であり、玄宗の愛やその故の悲嘆を描いた作品であると考える。

第二節 後段における玄宗と楊貴妃の隔絶

「長恨歌」の中で、仙界の存在となつてからの楊貴妃は「玉妃」と呼ぶこととする。従つて、それ以降の彼女のことは「玉妃」と呼ぶこととする。前述のとおり「長恨歌」は玄宗の悲しみに主眼が置かれている作だが、玉妃の言葉として、悲恋の悲しみが書かれている箇所も一部存在する。道士が玉妃を探し出し、玉妃からの言葉を聞く場面で、具体的には第百一句から第百十八句までである。特に第百十七句と百十八句「在天願作比翼鳥、在地願為連理枝」（天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らん。）は玉妃の心情を強く表した二句である。この二句はまだ楊貴妃が生きていた頃に「長生殿」^{注10}で玄宗と楊貴妃が互いに誓い合つて言つた言葉を玉妃が反芻して述べている箇

所である。「天にあつては翼を並べて飛ぶ鳥となり、地上にあつては枝が一つに合わさった二つの木となりましょう」という意味で、「比翼鳥」も「連理枝」も男女の仲が睦まじいことを表す言葉である。言うなれば、ここで玉妃は、この世では死に別れてしまったが、また別の世で結ばれようという未来への希望を述べているのである。

その一方で、玄宗は玉妃の言葉に続く、この詩の最後に第九句、第一百二十句「天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期」（天長く地久しきも時有りて盡く、此の恨み綿綿として絶ゆる期無からん。）

で、「恨」は未来永劫絶えることは無い、と述べる。「恨」とは前述の通り、叶わない愛を嘆き悲しむ気持ちの事である。この二句では、永久に続くかと思われる天地も朽ちる時が来るが、この「恨」の情念は永遠に残り続けると述べられる。悠久の自然と比較し、その自然をも超越するものだと言うことで、玄宗の強い悲しみを表現するだけでなく、玄宗の愛は今後永遠に成就しないものであることを強調しており、それがこの詩の悲劇性を際立たせていると言える。

第一百七句と第一百十八句、第一百十九句と第一百二十句を比べてと、永久に続く悲しみを述べた玄宗の言葉には、隔絶があること

は明らかであると言える。なぜ、このような隔絶があるのか。その理由は、玉妃は仙界に旅立った死者であり、玄宗はこの世に残された生者であるというところにあると考える。

そう考える根拠の一つに、第一百一句から第一百十八句の玉妃の言葉がある。まず、第七句、第八句の「旧物」つまりは生前の持ち物を道士に持ち帰らせようとする場面がある。玉妃はその「旧物」によって、深い愛を表そう、と述べている。ここで、玄宗が楊貴妃を失くして悲しむ様子を表現している第五十七句から第六十句をふりかえりたい。この四句では宮中に戻るとその景色は「皆依舊」つまり昔のままであり、蓮を見ても柳を見ても、まるで美しい楊貴妃のように見え、過去を思い出し、苦しい、という玄宗の悲嘆が述べられている。二人で過ごすことのできた日々や、楊貴妃という存在を思い出させるような昔のものは玄宗にとって見るのが非常に辛いものであることがわかる。そのような玄宗に対し、「深情」を示すために「旧物」を送ろうというのは、漢武帝が反魂香によって呼び出された李夫人の魂によって一層の苦しみを感じたように、余計に玄宗を苦しめる行為になるのだ。

また、玉妃は第一百一十句、第一百十二句「但教心似金鈿堅、天上人間會相見」（但心をして金鈿の堅きに似せしめば、天上人間會ず相見ん。）で、心が変わらなければ天上か人間の世かでまた会える

はずだ、と述べている。この考えは死者である玉妃であるからこそ言えることではないだろうか。生者が迷妄の中で、この世で愛し合うことに捕らわれ惑うのに対し、死者である玉妃が持つ愛は、現世に捕らわれることなく、生きた人間には逃られぬ惑いから超越した愛なのである。玉妃が現世の業から解放された存在であると考え、根拠に第七十四句が挙げられる。第七十四句では、楊貴妃が夢の中にも現れないと玄宗が嘆く様子が描かれている。中国古典における夢について陳明姿(二〇〇四)は、

古代人には、夢とは魂が神の教えを受ける場で、現実世界と密切な関係があるという意識がある。(中略)しかし、夢は神の教えを受ける回路であるばかりではなく、「鬼」が怨みや怒りを伝える場でもある。(中略)「鬼」も夢によって、怒りや怨みを伝えることができると考えていた。(中略)夢は神ばかりでなく、「鬼」が人間と交信する場でもあると考えられていた。^{注13}と述べている。

「鬼」とは靈魂の事である。中国古典において、夢とは現実世界と結びついたもので、靈魂が人間と交信する場でもあると考えられていたことがわかる。しかし、楊貴妃は、玄宗の見る夢には出てこない。これは、玄宗がもう永遠に楊貴妃と会うことは出来

ないという悲劇性の強調とともに、玉妃となった楊貴妃がもう現世への未練を残していないことを表していると考ええる。天上の仙女となった玉妃は人が生きていく上で逃れられない業から解放された存在なのである。一方、玄宗は第百十九句、第百二十句での世の自然と自らの「恨」を比較してその強さを述べているが、それは玄宗の「恨」がこの世のものであり、天上やまた別の人間の世でも晴らされるものではないと考えている、ということも含まれた表現であると考ええる。生者である玄宗は、人間の持つ業から逃れることが出来ないものである。だからこそ、もう叶わないものとして「綿綿無絶期」綿々として絶えるときは来ない、と述べるのだ。以上のように、死者である玉妃と生者である玄宗とは、その生死の差に基づいて、大きな隔絶が存在してしまっているのだと考える。

注

注1 松浦友久「唐詩にあらわれた女性像と女性観―閨怨詩の意味するもの―」(『中国文学の女性像』一九八二年三月 汲古院) p.157

注2 近藤春雄「長恨歌と楊貴妃」(一九九三年六月五日 明治書院) p.13

注3 下定雅弘「長恨歌」の現在―「李夫人」との異同に着目しつつ―

「三」長恨歌伝」と「長恨歌」(二〇〇七年七月 岡山大学文学部紀要47号) p.63

注 4 同右 p. 63-64

注 5 同右 p. 64

注 6 同右 p. 64

注 7 下定雅弘『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』（二〇一一年四月一日）

p. 48

注 8 「甘泉殿」：陝西省にあった宮殿のこと

注 9 「反魂香」：香料の名。この香をたくと死者が姿を現すという。

注 10 「長生殿」：華清宮の中に設けられた宮殿の名。玄宗皇帝の天宝元年（七四二）に造営され、「集靈台」と名付けられて、天神を祭った。

注 11 「比翼鳥」：南方にいる伝説上の鳥。雌雄がそれぞれ片方の翼しか持たず、一対が並んで始めて飛べるといふ。（『爾雅』積地篇）男女の仲がむつまじいことの喩えに用いる。

注 12 「連理枝」：幹は別々なのに、枝が合体して一つになっている木。

「比翼鳥」と同じく男女の仲がむつまじいことの喩え。

注 13 『日本古代文学と東アジア』田中隆昭編 二〇〇四年三月三日 勉誠

出版 「日中両国の古典文学における夢」—『文選』『玉台新詠』と

『万葉集』を中心にして—陳明姿 p. 22

（かつみ しおり 二〇一九年日文卒）